

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4372800807		
法人名	社会福祉法人 蘇南会		
事業所名	グループホームすみれ		
所在地	熊本県上益城郡山都町北中島2679-3		
自己評価作成日	令和4年9月1日	評価結果市町村受理日	令和4年11月1日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/43/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなる福祉サービス評価機構
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205
訪問調査日	令和4年9月28日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

すみれから眺める景色が緑が多く壮大で、四季折々の風景や食材を楽しむことができます。建物は古いですが、各居室のプライバシーが保てるよう、ドアを開けていても他の入居者や職員から見られることがなく、面会時も家族と人目を気にせずゆっくりと過ごすことができます。
また、イベントや受診日以外は、特にスケジュールを決めずに、その日その日、各々の入居者が過ごしたいようにしています。料理や食器洗い、洗濯や掃除などそれぞれに得意とされることはしていただいています。
昨年10月に若い外国人スタッフが入職したことで、孫と過ごすような感覚で活気があふれるようになりました。英語の歌や外国の手遊びを学んだり、日本の歌や習慣をスタッフに教えることで、役割や満

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

広大な敷地に点在する法人施設の一角に建つ民家型のホームは、自然の中の一軒家としての暮らしを展開している。朝の身支度を済ませた入居者がリビングに集い、掃き出し窓から四季折々の風景を望みながら法人関係者や出入り業者と会釈を交わしたり、有線放送で知人の名を耳にしたり、馴染みの地名が出るたびに声が上がります。楽しみ事の一つとなるなど、地域から距離を置く場であっても、人々との関わりが継続できる環境にある。入居者一人ひとりが活躍の場を持つ事で日々の生活を豊かにし、自信と誇りを持った表情は生き生きとしている。毎年掲げる事業計画は理念を踏まえた入居者支援が網羅されており、年度初回の運営推進会議資料に添付し、年度末に評価結果を報告してホームの姿勢を外部に向け明らかにしており、地域に開かれたホーム運営に今後も期待が持たれる。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに ○ 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている ○ 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが ○ 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない			

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	事務所の見やすい壁に理念を掲げ、研修や会議などの折に確認を行っている。 コロナ感染症の影響を受けない理念に関しては、理念に沿ったサービスを提供できている。	理念は事務所やリビングなど職員の身近な所に掲示して立ち返りの原点とし、月の会議でホームの方向性を確認している。入居者の持つ力は台所仕事や畑作業、趣味の手作業など、日常のあらゆる場面で発揮され、ひとつ屋根の下で一人ひとりが自信と誇りをもって生活する喜びを支えている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	令和2年、3年度は新型コロナウイルスのため実施できていない。コロナ感染拡大前は、立地的に地域に関わりを持つことは難しいが、地域行事への参加やなじみの場所への訪問を通し、なるべく交流が持てる機会を作っていた。 敷地内の他施設の職員や外部給食委託業者との接触が現在は交流の機会となっている。	立地上地域との日常的な交流は難しいが、コロナ禍にあっても状況をみながら花見や馴染みの祭りの出しもの見学など地域へ出る機会を持っている。運営推進会議資料に年間事業計画を添付し、地域から必要とされるホーム作りを目指すとしている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	運営推進会議で認知症の研修を実施したいが、運営推進会議が新型コロナウイルスのためできていない。 運営推進会議の開催が可能になれば、研修会を進めていきたい。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	現在は、運営推進会議が行われず、取り組み等を運営推進委員の皆様へ書面で送付しているのみである。文書でご意見を伺っているが、現在のところは返答を得ていない。	会議が直接開催であれば、行政や地域代表者、家族等が参加しており、毎回様々な意見が出されている。昨年度に続き本年も運営状況を書面で報告することでホームの透明性を図っており、個人情報に配慮しながら入居者の生き生きとした日常を写真で伝えている。	書類発送の折に関係者に報告書の感想や直接開催時に取り上げて欲しい内容などの意見をもらうような働きかけを期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	以前は運営推進会議で直接報告していたが、現在は伝える機会が少ない。運営推進会議録で書面や写真入りの行事報告を行っている。	運営推進会議が開催できない現在、管理者は報告書や外部評価結果を直接手渡ししながら行政担当者にホームの現状を伝えており、これまで通り良好な関係性を続けている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束に関する研修を行い、職員全員の理解はできている。また、身体拘束に関して、運営推進会議録に記載し報告を行っている。しかし、時折職員によってはスピーチロックに近い場面も見られるため、注意していきたい。	法人の全体研修から感染症の現状を考慮し、ホーム単独での勉強会に切り替え、拘束に繋がる行為について改めて共有するなど職員の意識強化に努めている。夜間帯のセンサーマットや感知センサーの使用については、家族への説明と了承を得るとともに、運営推進会議の資料で関係者に使用状況を報告している。職員のメンタルは仲間同士で支え合い、定期のメンタルチェックで自己を振り返るようにしている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待に関する研修を行っている。職員のストレスが虐待に繋がる危険性があることを各自が自覚するように促し、職員会議はポジティブと感じている思いとネガティブと感じている思いを互いに話せる場になっている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	権利擁護に関する外部研修に職員に参加してもらった。伝達研修では、ディスカッションを交えながら権利擁護の必要性の理解を深めた。まだ十分とは言えないため、研修の機会を設けたい。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入所の契約は個室で時間にゆとりを持って行い、入居者やご家族に落ち着いた環境で説明をしている。随時、電話等でご家族からの不安や疑問に対応している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者には、日頃から様々なご希望を聞くように心がけている。 すみれのご家族は定期的な面会(コロナ感染が落ち着いている期間は窓越し面会)があり、電話連絡も頻回に行っているため、職員が話をする機会が多く、要望も聞きやすい。可能な限りは要望に対応している。 契約時に、重要事項説明書で苦情の受付について説明を行っている。	感染症の状況に応じながら家族の面会方法を検討しているが、直接面会を心待ちにされる家族から開始時期を心配される声も寄せられるようである。ホームでは電話や窓越し面会時に家族に忌憚のない意見を求めており、入居者の要望は普段の会話から聞き取り、連絡ノートを活用しながら個々の希望に応じている。	今後も家族アンケートの継続によりホームの取組に対する家族の率直な意見を求めたり、広報誌で入居者の日々の様子を発信しながら現状を共有する事が期待される。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員会議や日々の連絡時に、職員の意見や提案を聞いている。 経験年数に関わらず職員からの提案は、できる限り取り入れるようにしている。	職員が普段から意見を出しやすい雰囲気づくりに努めており、出された意見や提案を職員会議で検討しながらホーム運営に反映させている。 新たにホームの一員となった外国からの入職者に孫を見るように入居者が気遣われたり、一緒に英語の歌をうたうなど、ホームに新たな風を吹き込んでいるようである。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	法人全体で運営しているため、すみれ独自の評価はできないが、休みの取りやすさや残業をなくす努力をしている。人事考課は行っていないが、処遇改善手当等を使い昇給に努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	現在は、コロナ禍で法人内研修実施が難しい。オンラインでの外部研修に参加できるよう努めているが、抵抗があり辞退する職員もいる。 すみれ内での研修は、担当制にし、職員皆が互いに教え合うことで知識を高めるようにしている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	現在はオンラインであるが、地域密着型施設で作る上益城部会に参加している。2か月に1回の会議に参加し、情報交換や勉強会を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居後慣れられるまではご本人の希望を聞き取り、不安なく過ごせるように小まめに関わりを持つようになっている。また、早く他の入居者との関係性を持てるように、椅子の配置の工夫やお互いが馴染みやすくなるような活動を実施している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	サービス前後に、家族の入居に対する意向に対して聞き取りを行う。入居に至る過程でご家族が抱く複雑な気持ちに寄り添うようになっている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居を決める際は、介護環境をポイントにしている。生活困難な状況の独居の方や介護支援が得にくい方をなるべく早く入居につなげている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	掃除、洗濯干し、洗濯たたみ、料理などできる範囲でしていただいている。準備をすると、声掛けする前に手伝いを始められ習慣化できている。 また、入居者同士、役割を持つことで、生活に充実感や楽しさを感じられるようにことあるごとに感謝の言葉かけしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	現在は、コロナ感染者の増加により面会は中止しているが、コロナ前は居室でゆっくり家族と過ごしていただいていた。 今は、直接電話で話していただいたり、職員が毎月近況報告を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナ前は地域の老人会への参加やふるさと訪問を行っていたが、現在は中止している。 しかし、地元の八朔祭りの作り物の見学、紅葉狩り、花見には人込みを避けて行き、入居者は大変喜ばれた。	職員移動が殆どないホーム環境は、入居者・家族の安心するところとなっており、入居者はそれぞれの得意分野を自らの役割として力を出し合い生活している。馴染みの化粧品を使い朝からの身支度を済ませリビングに降りられる方や、毎朝のコーヒーを楽しみ、職員のギターに合わせて馴染みの歌をうたうなど自宅での暮らしぶりそのままの生活が窺える。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	仲間意識が入居者にあり、関係性は良好である。介護拒否や帰宅願望のでる入居者はスタッフより入居者に介入してもらおう方が、スムーズに受け入れられる時もある。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	現在は、入院や他施設への入所になると面会制限があり、直接の本人との関係性を継続することは難しいが、退院後の受け入れ先の相談等には対応している。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	各入居者に担当職員がおり、日々入居者の心身面を細やかに支援できるようにしている。また、連絡ノートや申し送りで本人の要望等を職員が共有し、早めの対応ができるようにしている。 必要があれば、ケア会議を行いケア計画に挙げている。	私物の買い物の希望や箸が使いづらくなった方へのスプーンへの切り替え、足の冷えの訴えなど、入居者のニーズを担当職員や連絡ノートから収集している。出された要望は職員間で共有し、ケア会議などで検討しながらプランに反映するようにしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	なるべく今までのなじみのある生活に近づけるよう、農家の方には畑づくりや郷土料理づくりを通して楽しめるようにしている。 また、家族に協力してもらい、各自嗜好品も提供している。 本人のこれまでの生活パターンが変わらないよう起床時間や就寝時間は、一律に決めていない。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	高齢の入居者が多く、徐々に老化による体力の低下を来しており、日によって変化が著しくなっている。バイタルチェック、食事量、運動機能の変化に注意し、大きな事故につながらないように日々の観察を十分行うようにしている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	コロナにより担当者会議はできないが、電話で家族の意向を確認している。入居者の希望を聞き、職員会議を通し話し合いケア計画に反映している。	入居者・家族の意向を優先して、プランを立案している。「自分のことは自分でしたい」とする入居者の思いを食や体操への参加、プライドを傷つけないような関わり、有線放送や町の広報誌からの地域情報の収集などを通じて、地域の一人としての個人を尊重したプラン内容としている。ケアマネジャーは職員の観察力を支援に反映させ、家族との話し合いや説明には十分注意を払うようにしている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	ケア記録と連絡ノート、業務日誌を使用し、職員間で共有している。職員間で判断できないものは、管理者や関連施設専門職員に相談している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	家族の協力が難しい場合は、日常の買い物の代行や病院受診の送迎を行っている。また、立ち入り制限を行っているため、感染者が多い期間は職員が散髪を行っている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナの影響で地域資源を利用する機会が減少している。敷地内にいくつかの施設があり、小さなコミュニティを作っている。その中での挨拶や声掛けが社会資源となっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居によるかかりつけ医の変更の必要がないことを説明しているが、現在の入居者は全員関連医療期間がかかりつけ医となっており、時間を問わず相談しやすい環境にある。必要時は医師からの直接の訪問や電話もあり、柔軟な対応ができています。	本人・家族の意向により全員が系列法人の医療機関をかかりつけ医とし、月1回の受診をホームで対応し、結果や健康状態を家族と共有している。週2回看護師の勤務により、受診対応や健康管理、医師との連携などが図られており、職員にとっても心強いものとなっている。口腔ケアは食後の歯磨きや義歯管理を必要に応じて支援し、希望者に協力歯科による定期的な口腔ケアの指導が行われている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護師が週2日勤務しており、状態を把握している。定期受診や、必要時の受診もなるべく看護師が付き添うようにしている。また、かかりつけ医の看護師にも必要時は電話で助言をもらっている。コロナ感染者が少ない期間は、訪問歯科受診を定期的に受けている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入居者が入院した場合は、病院ソーシャルワーカーと定期的に連絡を取り、予後の情報を得ている。また、必要に応じて家族と病院との調整も行っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化した場合を想定し、関連の特別養護老人ホームへの最終的な入所を見込んで入居されている方が大半である。事前指定書は、前もってもらい確認している。	事前指定書により本人・家族の意向を確認し、ホームに出来得る支援に努めている。法人が特別養護老人ホームを運営しており、殆どの方が最終を特養への移行を臨まれている。家族はできる限り“すみれ”で過ごして欲しいと話されており、管理者は今後も入居者、家族にとって安心できる環境に職員と継続して取り組みたいとしている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	年に1回看護師による応急処置の研修を実施している。令和3年度は、数回急変事例があったが、速やかに対応ができたと思う。その後、反省点を拾い上げ、次に生かしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	地域との協力体制は立地条件の問題がありできていないが、関連施設の避難場所は確保できている。火災訓練は定期的に行っているが、地震・台風の訓練も行った。非常用物資は、法人でも施設独自でも備蓄できている。	この一年では11月に地震災害訓練、消防署の参加による火災訓練、5月に台風災害訓練を実施している。年2回は火災訓練を実施するなど、災害への対策に全職員が意識を持って取り組めるようにしている。先日の台風接近では訓練が役立ち、備えの必要性をあらためて感じたと語っている。備蓄はリストをもとに確保しており、研修会時に備品の再確認が行われている。	災害対策は家族にとっても気になる点であり、今後も訓練や備蓄の状況など家族への報告が期待される。また、感染症の状況を見ながら運営推進会議や家族にも参加を呼びかけた訓練の実施に期待したい。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	人権に関する研修を年1回行っている。職員会議でも度々取り上げ、注意喚起を行っている。 苗字で名前を呼ぶことが基本であるが、同じ苗字の職員もいたため下の名前で呼んでいる入居者がいる。 世代が近い職員は、敬語ではない方が伝わりやすい場面もあるため、使い分けて対応している。	年1回人権に関する研修会や職員会議の中でも取り上げ、周知を図っている。呼称は基本的に苗字としているが、同姓者がいる場合には下の名前でも対応している。個人情報の使用については家族の承諾を得ており、広報誌の中で顔写真は目隠しされている。職員は身だしなみなど必要に応じてサポートを行っているが、お化粧をしてリビングに集われる方も多いようである。髪の毛の必要時に感染症の状況を見ながら訪問理美容を支援する他、以前は面会を兼ね家族が居室で整髪、カットをされる方もおられた。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	1ユニットで、職員数も少なくマンツーマンでの会話も多い。担当職員が聞き取りを行ったり、作業や活動の中での会話を通しながら入居者のニーズ把握に努めている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	起床時間や就寝時間は在宅での習慣に沿って柔軟に対応している。また、常時見守りが必要でない方は、自室で過ごしていただく時間も自由になっている。 外出行事も希望されない入居者は留守番をしていただいたり別日に変更したりしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	化粧を自らする入居者が多く、介助が必要な方は職員が支援しながら服を選んでいる。コロナ感染が落ち着いている期間は、美容師に来苑してもらい散髪しているが、感染者が多い期間は職員が本人の希望を聞き、散髪している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	料理(野菜類のカット)や盛り付け、お茶配りなどできる範囲で入居者に手伝いを頼んでいる。 片づけは、食器洗いができる利用者にしてもらい、他の入居者は各自食器を分類してもらうなど少しでも参加できるようにしている。	献立は母体特養の栄養科からのものやホームでも差し入れや収穫した野菜を活用した献立を作っている。食材は発注や職員が地元商店などへ購入に出ている。季節感に配慮した献立や手作りこんにやくなど、毎日の食事は入居者の楽しみになっている。入居者はもやしのひげ取り、台拭き、下膳などできる事に取り組まれる他、味付けや盛り付け、カットなど職員にアドバイスをしながら、率先して調理に関わる方もおられる。コロナ禍により現在は、職員と入居者が一緒に食事を摂ることを控えている。	1名の検食者が入居者の代弁者として味や量、発せられた言葉などを記録に残し、今後に活かされることを期待したい。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	週に4日は管理栄養士による献立で、他の3日はすみれ内でメニューを決めている。 食事量や嗜好品等は、医師の意見を聞きながら調整をしている。 水分補給に関しては、食事間にお茶の時間を設けたり、数名は夜間帯に補水できるようにベッドサイドに給水用のペットボトルを置いている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、介助や見守りの下、全員口腔ケアを行っている。 また、定期的に訪問歯科受診をもらい、口臭や磨き残しのある入居者は、歯科医師や歯科衛生士の指導を受けている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄介助の必要な入居者は、ケア計画に挙げ統一した介助方法や声掛けを行っている。 失敗がないように必要な入居者には、定期的に誘い排尿の声掛けしている。	個々に応じた排泄支援が出来るよう、職員間で統一したケアを共有している。入居者は布パンツにパットの併用やリハビリパンツを使用されており、家族による排泄用品の購入も行われ、面会や職員との意見交換の機会ともなっている。日中は1階のトイレを使用されることが殆どであるが、夜間は居室のトイレやポータブルトイレを使用される方もあり、使用後は洗浄や日光干しなど清潔に管理されている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	体操や水分補給、繊維物の多い食品を取り入れるなど自然な排便ができるようにしている。しかし、便秘がちな入居者は医師に相談し、排便のコントロールをしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入浴が自立している入居者は、安否確認の声掛けのみで行ってもらっている。入浴される入居者は、計画的に決めずに随時流動的にしている。 入浴拒否のある入居者は、他の入居者に協力してもらい誘導できている。	基本的に週2回、午後からの入浴を支援している。拒否の方には無理強いせず、タイミングや他の入居者に誘導を協力してもらおう等、入居者間のほのぼのとした関係性が伝ってくる。洗身をはじめ個々に応じた介助や、自分で必要な品をかごに入れ浴室に来られ、時々の見守りのみで入浴される方もおられる。浴室内は掃除や整頓がなされ、シャンプーなどが置かれているが、個別で好みの物を準備される方もおられる。	入浴の回数については本人や家族等にも確認しながら、可能な限り希望に沿った支援に努めていける事を期待したい。脱衣所には干したみかんの皮や、茶葉を使った季節湯がイラスト入りで紹介されており、今後、再現できる機会があればと期待したい。
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	各入居者の睡眠パターンを維持できるように、生活習慣に応じて柔軟に対応している。また、日中も希望があれば昼寝をして無理のない生活をしてもらっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	受診後の服薬説明は個人カルテに挟み、受診時に変更があった場合は連絡ノートに記載し、職員が確認できるようにしている。また、服薬は毎食テーブルごとに分け2名で確認している。眼薬は、分かりやすいよう表を作って掲示している。 特に眠剤変更時は、詳細を介護記録に残し、効果や変化を医師に報告している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	各入居者の趣味や楽しみを考慮し、手芸や畑づくり、料理、映画鑑賞等を行っている。また、かるた取りやトランプは、入居者が主体となって行っておりよい刺激となっている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	現在は、コロナ感染症のため外出は行っていないが、天候が良い日は近隣への散歩をし、気分転換をしている。 コロナ感染の前は、月に1回ふるさと訪問を行っていた。感染が落ち着いた後には再開したい。	感染症の影響により実施していたふるさと訪問などは控えているが、状況を見ながら季節のドライブ外出は継続されている。また、広大な敷地は手入れが行き届き、鳥の鳴き声など馴染みの環境で入居者は散歩を楽しまれている。外出を含め日常の様子は広報紙で紹介されており、家族の安心につながっている。今後は状況を見ながらふるさと訪問の再開を計画したとしており、実現が期待される。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	コロナ感染前に行っていたふるさと訪問時は、買い物ができる店にも立ち寄っていた。各入居者は自分の財布を持っており、買い物の際は自分で支払っていた。買い物も非日常になっており、とても喜ばれていた。 現在は紛失防止のため金庫に預かっている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	手紙を書くことは困難だが、電話の際は取次ぎ直接話をしてもらっている。 ほとんどの家族は面会の機会が多く、家族との交流はできている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価		
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共用の空間は、無機質にならないよう木目調の家具を使用している。また、間接照明や柔らかい光の電球を使用し、落ち着ける空間を作っている。 リビングからは、広々とした庭や山々を眺めることができ、鳥や虫の声を楽しめる環境である。	訪問当日、入居者の賑やかな会話や笑い声、歌声などが終始聞かれ、ホームの活気ある日常が伝わってきた。また、職員の個々に応じた語り掛けや優しいサポートなど、職員自身が居心地の良い環境となっている。玄関先のプランターには入居者も一緒に植えた花苗やホーム内には敷地内に咲いた身近な草花を努めて飾っており、壁面と合わせて季節感を感じられるようにしている。照明も柔らかな光の物を使用し、落ち着いて過ごせるよう配慮している。		リビングでは新聞を広げたり、日課のトランプに歓声も聞かれ、今後も入居者が居心地や楽しみのある環境が継続されていくことを期待したい。
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	1階と2階にベンチを置きくつろげるようにしている。入居者の気持ちが不安定なときは、玄関ベンチで遠目に見守りをしながら、ひとりで過ごしてもらおうことがある。 また、掃除の合間のひと休みするときは数名2階のベンチに座って会話を楽しんでいる。			
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	家族と相談し、使い慣れたなじみの家具を持ち込んでもらい、自分の居場所を感じてもらおうようにしている。 また、各居室内に、トイレ・洗面所を設け、プライバシーを確保している。	採光や広さも十分な居室は、トイレや洗面台が備わっておりプライバシーにも配慮されながらゆっくり過ごすことができる。衣類や使用しない物品はクロゼットに収納されており、職員は歩行の妨げになる物はないか等も確認しながら整頓を心掛けている。入居の際には自宅で使用していた馴染みの品の持ち込みについて説明しており、入居日に持ち込まれた物品を家族と一緒に確認した記録が見られた。入居者の中にはテレビも持ち込まれており、好きな番組を楽しめる方もおられるなど、自分の部屋として居心地よく過ごされていることが窺える。		コロナ禍以前は居室内の整頓や衣類の管理、敬老の日には部屋や居室の掃除など家族の協力により実施されている。コロナの終息が見えない状況であり、引き続き職員による環境整備や家族への取組の報告により安心に繋げていただきたい。また、状況を見ながら少しずつ家族の協力が得られる日が来ることを願われる。
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	入居者の高齢化に伴い、転倒リスクが高まっている。夜間のみ、P-トイレを使用したり、センサーベルやセンサーマットを使用し事故防止に努めている。			